

■（１２０）走り出す「トロッコ」たちは…

今春も新人記者が入社してきた。本社で社会人の心構えや取材手法の研修を受けてから、各地に派遣されるのが通例だ。当然、赴任地は事前に伝えられていて、３月末までに新居は確保している。が、四半世紀前は違った。住み家を探さないまま、任地に送り出された。

入社したての記者が寝泊まりするのは、当時、局舎の宿直室だった。２４時間、先輩記者の働きをみながら仕事のやり方を学べ、という考え方だった。６畳間の隅っこに、わずかな着替えを段ボール箱に入れたまま置く。薄くて硬い布団を並べて、宿直の先輩記者と寝る。翌朝の仕事が早いからと急きょ布団を敷く記者もいる。外からパトカーや消防車のサイレンが聞こえると、先輩記者からすぐに「おい」と起こされる。

近くのアパートを借りて移ったのは２カ月後。「いびきがうるさい」と追い出されたのだが、内心ほっとした。それでも、後から思えば、プライバシーのないつらい時間も、仕事を早期に覚えるのには有効だった。

「トロッコ」。記者（＝汽車）にはまだなれないという意味で、新人はそう呼ばれていた。停車場は泊まり部屋。汽車がすでに歴史的な乗り物になった今、新しいしやれた呼び方はないだろうか。（山）